

價値ある男子をもつと切に想つて居る。ソフイイは自分が斯う云ふ男の爲に生れてゐる事や、斯う云ふ男子にふさはしいものである事、さう云ふ男子から幸福にして貰へる事又自分もさう云ふ人を幸福にして上げる事の出来るのを信じてゐる。ソフイイは其の人に會つて見れば必ず分ると信じてゐる。だが其の人を見出すのが仲々の骨折である。

ソフイイは婦人達の中にあつて、しとやかで忝々しい計ではなく、已に結婚した男子、或は年長の人々にあつてもさうである。同じ年頃の男子に對してはさうではない。彼等に敬せらるゝ爲めには別な態度をとる。ソフイイは自分にふさはしい慎深い素振りを棄てない。若し男子が慎深いならば、ソフイイは青春の楽しい親しみを彼等とつゞける、そして無邪氣な話をしては喜び、眞面目な話になると有益な事を學ぶ。若し話が無趣味になつたら直ぐにお終ひにする。男子が言葉巧みに媚びるのは、失禮な事として、ソフイイは之を矢鱈に賤しめる。ソフイイは自分の求

めて居る男子は、這麼事を云はない事を知つてゐる。そしてソフイイは慕はしい男子の品性を心の底に深く刻みつけて居るから、さう云ふ品性で無い振舞を他の男から受くるのは厭で堪らない。ソフイイは女性の權利に就て高尚な意見を抱いてゐる又清い感情の湧き出づる高尚な靈魂を持つてゐる。ソフイイは自分を喜ばせようとして厭な事を云ふ人を怒を以つて待遇はしないけれ共、恥かゝせる様な贅辭を呈したり、知らぬ顔になりすましてゐる。ソフイイは馬鹿な小才子の玩弄物になる爲に教育されたのでは無い。

ソフイイは益々智慧が成熟して、最早凡ての點に於て、二十歳位の婦人に發育した。實はまだ十五歳であるけれ共、もう子供同様に取扱つてはならない、両親はソフイイに、じつとして居られない青春のそわぐしさを現れて來たことを認めたら、直ぐと其の傾向の進まない内に準備をしなければならぬ。即語るには優しい道理に適つた事を教へなければならぬ。且年と品性とに相應しい事を話さなければならぬ

さて自然の儘では、人は思索する事が出来ない。思索するには他の技術を學ぶと等しく練習しなければならぬ。しかも甚だ六ヶしい練習である。男にも女にも各々二種の異つた等級がある。即ち考へる性と考へない性である。そこで考へる性の男子は考へない性の女子と結婚してはよくない、さう云ふ女と結婚すれば男は自分の考へる事に配け與ふる事が出来ず、爲に家庭生活の眞の喜を得る事が出来ないからである。婦人にして思考の力が無かつたら、何うして自分の子供を教育するだらう、又何うして子供の爲に最もよい事を發見する事が出来よう。どうして自分の知らない美德に子供を導いたり自分の知らない事を教へたりする事が出来よう。斯う云ふ女は自分の子供をあやかしたり、威嚇したりして、吾が儘息子をつくつたり、臆病息子をつくつたりするより外に教育の途を知らない。だから教育ある人が教育の無い女を娶つたり、教育のされない様な等級の女と結婚してはよくない、然し學問があり才があつて、家庭を圖書館か何ぞの様にして何も彼が一人で切り廻す様な女より

も、粗朴に育てられた、單純な娘の方がどれ程よいやら分らない。立派な婦人は決して虚勢を張らない。その人に才藝があるなら、假さうに見せかける様な馬鹿らしい事はしない。女の榮譽は夫の尊い處にある。女の樂みは家庭の幸福の中にある。女の容貌風采は結婚の第一義のものでは無い。いかにも最初に目につくものであるが、實は下らぬものである。結婚するには美人を求むべきでは無い。暫く經つと美貌の觀念は無くなつて仕舞ふ。六週間もすればもう美貌といふ事は思はなくなるが、美貌から來る危険は一生涯つきまとふものである。若し其の美人にして天使で無かつたら、その夫程悲惨なものはない。吾々は何事にも中庸を求めたい。女でも十人並の女がよい。戀を起させる顔よりも、深切な感じを與へる顔、氣持のよい引力のある顔の方がよい。心の美は顔の美の様に消え失せるものでない。結婚後三十年經つても、善良な婦人の美妙な心は結婚當座と等しく夫を樂ませる。

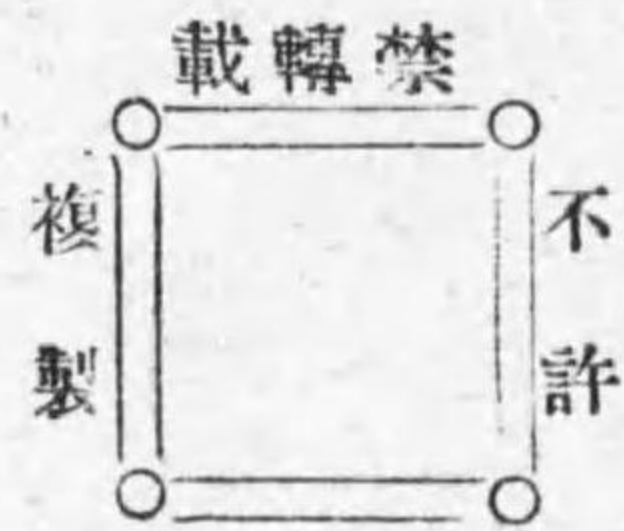
私がソフイイを選んで教育したのも茲に理由がある。ソフイイはエミールに最も

適した女である。ソフイイはエミイルの眞の佳偶である。ソフイイは一寸見たばかりでは著しい印象を興へる婦人ではない。けれども、日に日に清新な妙味を現はす婦人である。ソフイイの感化は自然々に現はれる。従つて彼女と交際して初めて其れに氣が附くのである。特にソフイイの主人は其を切に感ずるであらう。

さてエミイルは今迄、他の生物と自分との身體的關係を學び、人と吾との道德的關係を學んだが、更に之から同胞國民の政治的關係を學ばなくてはならぬ。彼が此の目的を達するには先づ一般の政治の性質及び様々の政治を研究し、其の後彼が支配せられる特殊の政治を研究しなければならぬ。

——エミイル終——

大正十五年九月十五日印刷
大正十五年九月三十日發行



世界名著叢書第一編
定價金八十錢

譯者	加藤朝江
發行者	世界名著叢書刊行會
印刷所	平尾清治印刷所

ルツオ懺悔錄

東京市芝區櫻田備前町十六番地

發行所

書籍出版
取次販賣

生方書店

振替東京五九〇〇三番

550
116

終

